

## イスタンブールにおけるアレヴィーのデルネッキ(現地報告)

著者	斎藤 完(解題：佐島 隆)
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	現代の中東
巻	32
ページ	79-89
発行年	2002-01
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005815">http://hdl.handle.net/2344/00005815</a>

## イスタンブルにおける アレヴィーのデルネッキ

斎 藤 完

解題：佐島 隆

### 解題—アレヴィーの現在—

- I はじめに
- II カラジャアフメット協会の創設
- III 同協会の機構
- IV 同協会の建物にまつわる経緯
- V 同協会の建物の構造
- VI 同協会の活動内容
- VII おわりに

### 解題—アレヴィーの現在—

この記述の「現在」は2001年7月である（I節以降の斎藤執筆箇所は「4月」）。現在アレヴィー集団の動勢、趨勢は転変の最中にある。この時点でもアレヴィー集団に関連した問題は幾つかある。その一つを示すならば、トルコ政府の宗務庁が独自におこなった調査結果とされる「秘密の見解」、すなわちアレヴィーが「スンニー派」に属するという見解<sup>(注1)</sup>によって引き起こされた「波紋」である。

それまでアレヴィーは、むしろシーア派に近いイメージが持たれてきた。そもそもアレヴィーとは「アリを信奉する人々」という意味であることが示すように、アリに連なることを共同体の指導者としての根拠としたところがあったこともあり、シーア派との類似をイメージされても不思議はない。1990年代後半のトルコでは特に、メディ

ア、マスコミにおいてシーア派との類似点、起源としてのシーア派が口の端に上った。それを考え合わせても、スンニー派に属するとの見解は、問題が起こる可能性がある。およそ500万～2000万人と言われるアレヴィー集団に属する諸団体の中には、反対するもの、無視するもの様々な反応があった。宗務庁（長官）を対象にした抗議文、質問状を提出した団体・協会が幾つかあった。その時点でも、ジェム・ワクフ、カラジャアフメット協会、アイドゥス・ワクフ、ヒュセイン・ガーズィー協会、ドイツ・アレヴィー連盟などに「反応」があったことが知られうる。各々の団体の性格はおおの異なり、その取り囲む社会的・政治的・文化的環境や背負っている歴史的、伝統的なものも異なることから、その反応や対応にも違いが出て来ると考えられる。これについてはこれ以上の言及をさけない。機会を別にすべきであろう。

ともかくも知り得ることの一つとして、アレヴィー集団に対する認識が不明瞭であることを確認できるであろう。アレヴィー集団に向けられた「まなざし」には思い違いや誤解（さらには偏見につながるもの）が込められているとも考えられる。従来、アレヴィー（アレヴィーリキ）はイスラームの異端とも異教とも言われた。また彼らおよびその周辺の人々と話をしていると、アレヴィーはムスリムではないと聞くことがある。彼ら自身がムスリムではないと言うこともあるし、スンニー派の人が言う場合もある。

実際のところ、アレヴィーを自称する人々の中にはイスラームへの帰属意識を持っている者が多い。非常に敬虔なムスリムであることもある。その方式はシーア派に属した方式をとる者や、スンニー派(宗務庁)に近づけようとする者もいる。しかし「ムスリムではない」という者もいるのである。

そこで「ムスリムではない」という発言(言説)を考えてみると、この発言には様々な文脈が交錯している。誤解をおそれずに単純化するならば、この「ムスリムではない」という意味には二つあると考えられる。すなわち(1)アレヴィーと対置される概念がイスラーム＝スンニーである場合。(2)アレヴィーと対置されるのがイスラームの体系全体である場合。この二つである。

(1)の場合であれば、トルコ共和国では宗務庁すなわちスンニー派イスラームによる宗教行政が実施されていることもあり、これから外れると、そしてシーア派イスラームでもなければ、ムスリムではないことになる。するとアレヴィーはイスラームの中に属するけれども、スンニー派ではなく、シーア派でもない集団と考えることができる。この場合にはアレヴィー「派」に近くなる。この方向からするとアレヴィーをタリカト(教団組織)の一つとすることはほとんどないが、メズヘプ(法学派)の一つとすることはある(しかしアレヴィー集団の中にはメズヘプ的な拠り所をジャーフェリー派に求める者がいないわけではない)。

(2)の場合であれば、イスラームではない異教ということになろう。したがってアレヴィーはヤフディ(ユダヤ人)やゾロアスター教徒と(あるいはアテリスト<無神論者・無宗教者>とも)併置されることになり得る。これからするとアレヴィー「教」に近くなる。

おそらく(1)か(2)かどちらか一方のみということではなく、(1)でもあり(2)でもある総体、多様なものを包摂した総体であるのかもしれない。あるいは「アレヴィー」を構成する要素が数多くあり、アレヴィーは、そのときどき状況に合わせながら

その諸要素の組み合わせを選び取って生き延びているのかもしれない。いずれにしても、既成の一つの分析視角で明瞭に割り切れるものではない。以上から分かることは、今のところ定見がないということである。

これら理解の困難さは、現在のアレヴィー集団の多様性から来ていると考えられる。この多様性を理解するためには幾つかのアプローチがあり得る。少なくとも、実態から現象そのものをそのまま理解する必要があるのである。必要なことは、本質に迫るといいつつ起源論的に理解することではないであろう。むしろ実態の観察から、その特徴の類型を含め、現状からのオントロギー的な把握をし、現象を解明することであろう。もちろん歴史的な限定性、歴史的影響を考慮しつつ、これらを混乱させずに、解明する必要もある。そこで実態をあらためて観察するために、研究者を組織して、現在、努力中である(注2)。

その観察によってわかることの一つは、アレヴィーの活動母体が多数あり、一つに統一されていないことである。デルネッキ(協会)やワクフを組織して活動する場合もあれば、組織しないで活動する場合もある。ラーイクリッキ(世俗主義)を標榜するトルコ共和国にあっては、宗教活動ができないことから、文化的活動団体としてのデルネッキを組織しないことには公的に活動できないのである。またアレヴィーの人々は固まって集落を形成することが多いことから、地域の集落においては、村落の生活組織あるいは「村ぐるみ」で活動母体となっていることが観察される。デルネッキが都市部のみにあるという訳ではないが、都市部において活動するためにはデルネッキ(あるいはワクフ)を組織する必要があるのである。

ここではイスタンブルの中でも、人数や活動などにおいて比較的有力とされるデルネッキに関する活動と思考様式について研究協力者の斎藤完氏が報告する。斎藤氏はイスタンブルに見られる最も大きなデルネッキの一つに入りこみ、実態

を観察したからである。都市におけるアレヴィーの活動と思考様式について、政治・社会との関連も考慮しながら記述している。今回は、紙幅の関係もあるので、その中でも部分的な報告にとどまるが、アレヴィーの現在を知る手がかりの一つであると考えられる<sup>(注3)</sup>。(佐島 隆)

## I はじめに

現在、イスタンブルにおけるアレヴィーたちの主な活動拠点の一つとして挙げられるのはデルネッキ、すなわち「協会」である。本稿は2000年夏と2001年春におこなった現地調査に基づき、デルネッキという場と、そこに集う人々の活動状況などの実態を明らかにするものである。

アレヴィーのデルネッキは、その全体的把握を試みたリュトゥッフィ・カレリの著書に基づく(1)霊廟や修道場の修復と活性化を活動の主な目的にする団体、(2)移住してきた同郷者間の相互扶助を主な目的に据えたもの、(3)文化振興を主な活動目的に掲げている団体などに大別することができる。そのうち本稿では(1)を取りあげたい。(1)を取りあげたのは相対的に(1)の数が多く、さらに(1)と(2)(3)の間に目的の相違は存在するもののその活動内容において大きな差がないため、(1)をもってイスタンブルにおけるアレヴィーのデルネッキを代表させることが可能であると考えたためである<sup>(注4)</sup>。

イスタンブルでは(1)に分類されるものとして18団体が確認されている。これらの中から、カラジャアフメット修道場を活動の拠り所とする Karacaahmet Sultan Kültürünü Tanıtma Dayanışma ve Türbesinin Onarma Derneği(カ

ラジャアフメット・スルタン文化普及、相互扶助、および霊廟修復協会:以下、カラジャアフメット協会)を集中的に調査した。

この団体を取りあげたのは、これがイスタンブルにおいて最大規模かつ活動的であるとされる四大団体の一つであり<sup>(注5)</sup>、その創立が1969年と、(1)のなかのデルネッキのなかでも「老舗」的存在であり、アレヴィーが社会にその存在をアピールする先駆けとなった団体だからである。

## II カラジャアフメット協会の創設

協会名にあるカラジャアフメット・スルタン(?-1335?)はホラサーン地方の出身で、後にアナトリアに移住してきたと言われている<sup>(注6)</sup>。そしてイスラーム神秘主義者ハジュ・ベクタシュに教化され、その後ベクタシュの命を受けてマニサ、アクヒサル、アフヨン、イスタンブルのウスキュダルで布教活動をおこなった<sup>(注7)</sup>。現在、これらの地にはその廟があり、そのうち、ウスキュダルにあるものを拠点として設立された協会がカラジャアフメット協会である。その創立までの経緯は次のとおりである<sup>(注8)</sup>。

カラジャアフメット・スルタンの霊廟がトルコ共和国成立以降、初めて注目を集めたのは1940年のことであった。それは、同協会の創立者の一人であるアフメット・オズデミルが同廟を参詣したときにカラジャアフメット・スルタンがアレヴィーの聖人であることを聞きつけたことに始まる。そして1948年ごろには同廟を管理することが検討され始め、さらに1952年になって廟に電気がひかれるようになった。その後、1964年に第1回ハジュ・

ベクタシュ記念祭が開催され、そこで多くのアレヴィーたちが互いの存在を知るようになった。これをきっかけとして、カラジャアフメット・スルタン廟を拠点としたデルネッキ創設が話し合われた。そして出身地を異にする22名が中心となって、同協会が1969年に設立された。付け加えると当時、イスタンブルにアレヴィーのデルネッキは存在しなかった<sup>(注9)</sup>。

協会設立の目的には、カラジャアフメット・スルタンの廟および附設施設の修復やその周辺の整備、修復後における廟および附設施設の管理と維持、カラジャアフメット・スルタンの研究、その文化の周辺地域や国内外への普及、周辺地域住民への食事の提供と参詣のための施設提供、「我々の文化」に関する図書館の開設および出版物の販売などである<sup>(注10)</sup>。そのなかには「アレヴィー」という文字は見当たらず、「我々の文化」という言葉からその含意が推測されるのみである。

### Ⅲ 同協会の機構

カラジャアフメット協会は現在4000人以上の会員を有する団体となっている。入会資格は、トルコ共和国の定める法令2908号協会法第4条および第16条によって規定されている<sup>(注11)</sup>。そしてその入会には、入会希望者が本部運営委員会の委員と協会の会員の推薦を得たうえで申請書を提出し、本部運営委員会がそれを審議する手続きをとる必要がある。

カラジャアフメット協会の組織は総会、本部運営委員会、管理委員会、規律委員会、支部から成る。なお、規律委員会と支部を除く各機関は協会法によってその設置が義務付け

られている。以下、この各委員会について協会規約に基づいて詳述する<sup>(注12)</sup>。

総会は同協会の最高機関であり、本部会員と各支部の代表者から構成される。総会の任務と権限は協会法第26条に定められているのとはほぼ同じで、各機関の構成員の選出と規約の変更、本部と支部における運営委員会および管理委員会からの報告の検討、本部運営委員会の提出する予算の議決、必要な動産・不動産の購入や抵当に入れることに関する権限の本部運営委員会への委譲、徴収した年会費の合計の確認、協会の解散の決定などである。

本部運営委員会は総会によって選出された、2年間の任期をもつ15人の正委員と15人の準委員からなり、同委員会からはさらに委員長、副委員長、書記、スポークスマン、会計が選出される。規約の第10条によると同委員会の任務と権限には、協会のすべての事業に関する権限の保持、協会の帳簿の作成、予算や収支計算書の作成といった協会法第27条に定められている項目以外に、総会の招集、会員からの要請の審議、相互扶助委員会の結成、銀行口座からの金銭の引き出し、協会に寄進される各種不動産の受領、動産や不動産の購入、各機関に必要な人材の確保などがある。

管理委員会は総会によって選出された、2年間の任期をもつ5人の正委員と5人の準委員からなり、同委員会からはさらに委員長、副委員長、報告委員が選出される。規約の第11条によると同委員会の任務と権限には、協会法第29条に定められている、本部運営委員会の作成した帳簿や記録さらにはその活動の監査以外に、本部運営委員会への参加や総会の招集などがある。

規律委員会は総会によって選出された、2

年間の任期をもつ5人の正委員からなり、同委員会からはさらに委員長が選出される。規律委員会は本部運営委員会の招集に応じて開かれ、会員間の諍いの調停、規律を乱す者への警告、本部運営委員会の決定とそれに対する異議の調停、会議における調和の維持、会員に対する処罰の決定などをおこなう。それらの決定は本部運営委員会の決定項目に記載され、決定の実行および責任は本部運営委員会に属する。

支部は本部運営委員会の決定のみをもって開設することができ、その組織は本部と同様に支部総会、支部運営委員会、支部管理委員会、支部規律委員会から成る。

以上が規約から知ることのできるカラジャアフメット協会の概要である。それではその実際はどのようなものなのだろうか。現地調

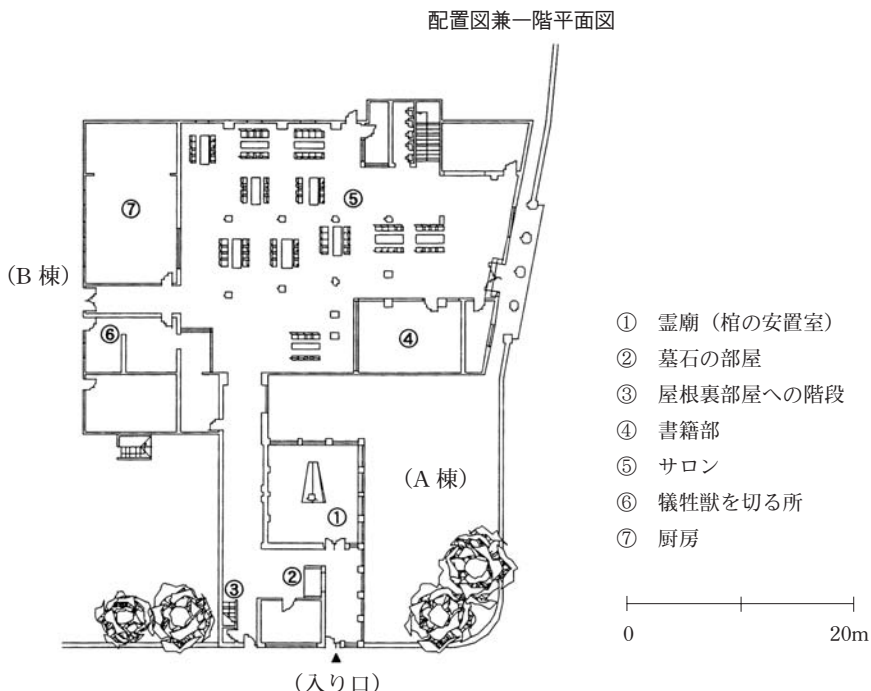
査に基づく以下の報告でそれを明らかにすることにする。

#### Ⅳ 同協会の建物にまつわる経緯

同協会はイスタンブル市内でも有数の歴史と規模をもつカラジャアフメット墓地の一角にある。同協会の真向かいにはカラジャアフメットの名を冠したモスクがある。カラジャアフメット・スルタンはアレヴィーだけでなく、スンニーからもスンニーの聖人として崇められているのである<sup>(注13)</sup>。

協会は図に見られるように平屋の建物（以下、A棟とする）とその約3倍の広さをもつ三階建ての建物（以下、B棟）から成っていて、これら二つの建物は異なる時期に建設された。

A棟はかつてイスラーム神秘主義教団であ



(出所) 宍戸克実・佐島隆作成。



るベクタシ教団の修道場であった。それがオスマン朝トルコの皇帝マフムート二世が1826年に同教団を閉鎖して以来、この建物もベクタシ教団のものではなくなってしまった。

また、B棟は1995年に完成したものである。その建設は1989年の選挙でイスタンブール市長に当選した共和人民党のヌレッティン・ソゼンによって許可されたのだが、1994年選挙で同市長に当選した繁栄党レジェップ・タイプ・エルドアンがそれに対し中止命令を出し、協会側がそれを裁判に持ち込んで完成にこぎつけたという経緯がある<sup>(注14)</sup>。共和人民党とはトルコ共和国建国の父アタテュルクが創設した党であり、現在は中道左派政党となっている。一方の繁栄党はイスラーム（スンニー）政党で、1998年にはその活動が国是である政教分離の原則に反するとの理由から解党させられ、2001年3月現在、美德党として政治活動を続けている。

補足するとこの建設の経緯の背景には、厳格な原理主義的傾向にあるスンニー・イスラームからするとシャリーアを軽視しているように見えるその生活様式のために、アレヴィーが差別・迫害されてきたという事情がある。この差別や迫害は現在でも続いているとアレヴィーたちによって認識されており、その例として1993年のスィワス事件や1995年のガズィ・オスマンパシャ事件がしばしば指摘されている<sup>(注15)</sup>。

## V 同協会の建物の構造

以下に同協会の建物の構造を概観する。建物の外観はA棟とB棟で異なる。B棟は箱型の建物にすぎず、それからアレヴィー固有の

建築様式を見て取ることはできない。他方、A棟はその扉や窓の鉄格子が緑であることから、そこが霊廟であることを窺い知ることができる。

カラジャアフメット協会の入り口はこのA棟にあり、扉の左側には大理石に黒字で「トルコ共和国文化省イスタンブール霊廟博物館管理部、カラジャアフメット・スルタン廟」と刻まれている。スンニーの集うモスクは宗務庁の管轄下におかれているのに対して、アレヴィーが集うこうした場所は文化省の管轄下にある。アレヴィーたちは自分たちの集う「聖なる」場所を宗務庁の管轄下に組み込むように働きかけているのだが、2001年春の時点ではまだ実現していない。

さて、入り口から入って正面にカラジャアフメット・スルタンの廟がある。廟の中はその壁や絨毯が緑色で統一されている。窓は東向きに三つ、南向きに四つの計七つある。天井はドーム状となっており、そこからシャンデリアがつるされている。棺はシャンデリアの真下、部屋の中央に置かれており、それには緑色のカバーが掛けられている。

そこには週末などの休日ともなると多くの人々——老若男女を問わず——が参詣に訪れる。参詣の仕方は、手を胸のやや下の位置で上にかざして立ったままおこなう者、両手両膝を床につけながら棺の周りをまわる者の二つのスタイルが見て取れる。

廟から出て、通路に沿って歩くと右側の壁に掲示板があり、同協会からの通知などと並んで、カラジャアフメット・スルタン、ハジュ・ベクタシュ、聖アリ、聖ハサン、聖ヒュセイ、ン、ピル・スルタン・アブダル、フドゥル・アブダル・スルタンのポスターが貼ってある。

彼らは聖アリから順に、預言者ムハンマドの娘婿、聖アリの第一子、聖アリの第二子、オスマン朝時代の吟遊詩人、カラジャアフメット・スルタンの息子となる。さらに正面には聖アリ、ハジュ・ベクタシュ、カラジャアフメット・スルタン、国父ムスタファ・ケマル・アタテュルクの肖像画が掛けられている。

同協会青年部のメンバーによると、彼らは以下の理由から聖人視されている<sup>(注16)</sup>。まず、聖アリはムハンマドの右腕であり、娘婿であり、正統的な後継者、さらにはアレヴィーの始祖である。また聖ハサンと聖ヒュセインはその聖アリの直接的な後継者であり、さらに預言者ムハンマドが存命中に直接的な交流があるため、彼ら以降のイマーム<sup>(注17)</sup>たちよりも特別視されている。また聖ヒュセインはケルベラの戦いで壮絶な最期を迎えたため受難の象徴でもあるらしい。そしてハジュ・ベクタシュは7代目イマームの家系で、アナトリアに定着したアレヴィーの偉人なのだそうです。彼の偉大さはトルコ語でその教義を広めたことと人間性の重要性を強調した点にある。また、このハジュ・ベクタシュの偉業を広めた聖人としてカラジャアフメット・スルタンは敬慕の対象となっている。最後にアタテュルクであるが、アタテュルクはハジュ・ベクタシュと同様に人間性や平等を強調した偉人であり、さらにはアレヴィーのよき理解者であるために、壁に彼の肖像画を飾るなどして彼をたたえているのだと語ってくれた。

A棟とB棟は一階部分でつながっている。この通路に沿ってB棟に着く。途中、梁の部分に「自分の口にする物、自分に連れ添う者、そして仕事に責任をもて」(ハジュ・ベクタシュ)、「最大の礼拝は人に奉仕することである」

(聖アリ)などといった上記の聖人たちによる格言がパネルに書かれているのが目にとまる。こうしたパネルはB棟のサロンにも見られ、全部で九つあった。

サロンには11台のテーブルがあり、共同体に属する人々の集会場となっており、また互いの意識を共有できる場所となっている。サロンの別の一角にはアレヴィー関係の書籍や音楽テープなどの関連商品が売られている。その陳列物のなかには同協会出版部から発行された4冊の本と月刊誌『心の声カラジャアフメット・スルタン』も含まれている。

二階部分には協会長(=本部運営委員長)室や秘書室、それにコンピューター教室、セマー教室、ジェムエヴィがある。同協会の三階部分はB棟の敷地のほぼ全部の広さ(約600㎡)を有する食堂兼会議場である。これらの教室やジェムエヴィなどに関しては以下にその活動内容と共に報告する。

## VI 同協会の活動内容

カラジャアフメット協会の活動の一つとして、まず、協会の運営に関わる部屋を除いたすべての空間を会員以外の一般にも開放していることが挙げられる。たとえば、一階のサロンにいる人の多くはアレヴィーを自認しているが、同協会の会員ではない。彼らの多くは廟を参詣した人や集会に<sup>ジェム</sup>参会しに来た会員以外の人々なのである。また平日のことであったが、向かいのモスクでおこなわれる葬式の女性用の控え室としてこのサロンが使用されていたことがあり、このことから同協会がスンニーに対してもその門戸を開放していることがわかる。



また、同協会は教育活動に力を入れている。それには二階部分のコンピューター教室にみられるようにアレヴィーの文化とは直接的には関係しないものも含まれる。また同様に、同協会は会員の家族を対象に奨学金供与などもおこなっている。

その一方で、セマーというアレヴィーの文化において欠くことのできない踊りを教える教室もある。これは毎年10月に開講され、対象は16歳以上であれば会員であるなしを問わず受講することができる。その教室はたたみ20畳は優にある広さで、床にはカーペットが敷き詰められており、土足厳禁である。壁には前述した聖人や偉人の肖像画、そして半月刀などが掛けられている。さらに、燃え盛るビルを背景にセマーをする男女の絵も掛けられている。この絵は1993年のスィフス事件で「炎の中でセマーをしながらその最期を迎えたアレヴィーたち」<sup>(注18)</sup>を描いたものだという。

セマー教室は毎週日曜日の10時から17時の間におこなわれている。アッバス・ゲンチ氏がセマーの指導をおこない、弟のドゥルムシュ・ゲンチ氏がバーラマで伴奏している。バーラマとはたまごを縦割りにした形の共鳴胴に、細長い棹がついているトルコの撥弦楽器で、別名サズとも呼ばれている。弾き方はギターのそれと大差ない。

そのレッスン風景は見るができなかったが、A・ゲンチと彼の補佐役である協会青年部の若者たち6名(男3名、女3名)がセマーを見せてくれた。そのセマーは所作やフォーメーションが固定されたもので、全員、動きが敏捷で振りがぴったりと合っており、特に独楽のようにくるくる回転する女性のセマ

ーは圧巻であった。

また、セマー教室に並ぶアレヴィーの文化に直結する教育活動には、バーラマの教室がある。バーラマは単にセマーの伴奏だけではなく、後述する集会<sup>ジェム</sup>のなかで重要な役割を果たすものである。

さて、B棟の二階部分にはこれらの部屋に加えて、ジェムエヴィがある。ジェムは「集会」を、そしてエヴィは「家」を意味する。そのかつての状況についてアレヴィー研究家のルザ・ゼルユトは「集会<sup>ジェム</sup>には人々にとっての礼拝的機能や精神の浄化作用に加えて、共同体に、そして個人に関する問題の話し合いも含まれて」おり、したがって「個人的問題も、家族の問題も、そして個人が共同体に対して起こした問題も、集会<sup>ジェム</sup>で話し合われ、解決法が導き出された」<sup>(注19)</sup>と語っている。しかし、こうした「伝統」に基づく集会<sup>ジェム</sup>であるが、同協会の規約にはそれに関する記述はない。

同協会のジェムエヴィは500人以上が収容できる広さであり、床にはカーペットが敷き詰められ土足厳禁となっており、その壁にも聖人・偉人たちの肖像画が掛けられている。

集会<sup>ジェム</sup>を取り仕切るのはケマル・ウウルル・デデである。ケマル・デデは1942年エルズインジャン生まれで、カラジャアフメット・スルタンの子フドゥル・アブダル・スルタンの家系に属す。人々は彼をケマル・デデないしデデと呼んでいる。デデとはアレヴィーの共同体ないしデルネッキのような場において精神的指導者であり、そのすべてがこのケマル・デデのように聖人の家系に連なるとされる。このデデという存在とその役割であるが、このことも「集会<sup>ジェム</sup>」と同様に同協会の規約には

明記されていない。

カラジャアフメット協会において、集会は木、土、日曜日の週3回である。今回の調査で見ることができたのは日曜日の午後1時からおこなわれたものである。ちなみに、集会のまえには三階の食堂でハルク・ロクマスといわれる無料の食事の提供がおこなわれ、大盛況であった。この食堂は会議場も兼ねており、同協会の総会のほかに講演もおこなわれている<sup>(注20)</sup>。また、その一角にはケマル・デデのための小さな部屋がある。

ジェムエヴィではケマル・デデが壁際に設置された壇上に座り、彼を要にして扇形に参会者たちが参集している。ケマル・デデから向かって右側に男性たちが、そして左側に女性たちが、思い思いの座り方で座っている。その数は全体で100名前後で、男女比はほぼ同数である。女性には全員スカーフの着用が義務付けられており、スカーフを持っていない者には雑務系の男性がスカーフを貸与している。

ケマル・デデはマイクを通して集会を取り仕切っている。集会が始められるまえに説教がおこなわれた。その内容は、集会とはすべての創造されし者が集うことで、そこには平和、自由、平等、礼拝、愛が満ちており、イスラームの伝統に沿うものであるというものであった。

説教のあと、ケマル・デデが参会者たちに向かってこれから集会がおこなわれることに對しての賛否を尋ね、参会者たちがそれに賛同する声をあげた。これが3回繰り返されることで集会が正式に始まることとなった。

ケマル・デデはバーラマを奏でながら歌を歌う。1曲目の主題は預言者ムハンマドであ

った。この歌詞が歌われることによって参会者たちの心にムハンマドを呼び起こさせるらしい。参会者たちは曲のサビの部分で自発的に合唱したり、「アッラー、アッラー」という掛け声を掛けたりしている。曲の終わりには、ケマル・デデが祈禱を唱え、その間、参会者たちは一斉に土下座の格好をする。この祈禱はこれに続く各曲の終わりに唱えられ、参会者たちの土下座も繰り返された。

次は「アッラーのほかに神はなし」というアラビア語の文句が歌詞のなかにちりばめられている曲で、その主題は12人のイマームである。これは同じ旋律を何度も繰り返す形で15分以上も続けられ、参会者の半数以上は身体を軽く揺らしながらケマル・デデの歌に合わせて歌っていた。

セマーもおこなわれた。ただしそれはセマー教室で見られたような敏捷性や訓練された統制を伴ったものではない。それは女性4人がデデの前で円周運動するもので、その時間も教室でおこなわれたものより遥かに短かった。このセマーが女性だけでおこなわれたのは、おそらくセマーの前に「われらが母、ファトマ（聖アリの妻）」という歌が歌われていたことに関係すると思われる。

セマーに続いたのが、聖ヒュセインがケルベラの戦いで惨死したことを歌ったものである。案内役を買ってくれた青年部の若者はこの曲の間中、目頭を押さえていた。また、嘆き女はいないが、いたるところで悲しみに浸る参会者の姿がある。曲が終わると、先ほどスカーフを手渡していた男が、桶から水を手にとってそれを参会者たちに撒き散らす。

その後、ケマル・デデは一人の男にほうきを手渡し、男はそれに口付けをして受け取る。

「アッラー、ムハンマド、アリ」という掛け声に合わせて、男が床を3回掃く所作を見せる。そしてほうきを持った男とスカーフを配っていた男はデデに対して並んでお辞儀の姿勢をとり、デデが祈禱を捧げて集会は終わった。時間は2時半を回っていた。なお、僅かながらではあるが参会者の中にはスカーフの被り方からスンニーと思われる若い女性の姿も見られた<sup>(注21)</sup>。

## Ⅶ おわりに

以上の観察から見えてくるものは次のようなものである。

まず「協会」を拠点としてアレヴィー的活動がなされていることが挙げられる。その活動の内容は<sup>ジェム</sup>集会の開催、アレヴィー「思想」の再確認、そして会員・非会員を問わずそこに集まる人々同士のアレヴィー的結びつきの強化がおこなわれていた。こうしたアレヴィー的活動を通して、さらに建物に貼られているパネルの格言（この格言は聖人・偉人の肖像画を通じて強化される）などを通じて、アレヴィーたちは彼らの道徳と秩序や人間関係の「あるべき姿」を身につけている。

そして組織としての協会は現代トルコ社会の法律に則りながら、かつてからのアレヴィーの方式を当てはめ、運営していることが指摘できる。それは<sup>ジェム</sup>集会や伝統的な職階であるデデの位置が超法規的な存在になっていることから伺えるのである。

(注1) アレヴィー団体の雑誌 *Cem*, 2001.4. によると、週刊誌 *Yeni Düşünce*, 2001.02.16-22号の中にその「発言」があったとする記事が載っている。他に

も諸協会・団体から出している雑誌の中にはこれを扱っている記事を見ることができる。

この問題の他にも「アレヴィスタン独立」などの問題があったという者もいるが、それは話題の範囲が局部的にとどまり、まもなく、音沙汰無くなった。東南部のクルド系アレヴィーを、アナトリアにみられるテュルクメン・アレヴィーやタフタジュ・アレヴィーなどのトルコ系アレヴィーと同じカテゴリーに入れることについても問題があるであろう。

(注2) これは文部科学省(日本学術振興会)科学研究費、基盤研究(B)(1)「アレヴィー・ベクタシ集落における伝統的文化の変化と持続に関する調査研究—トルコおよびブルガリア—」(研究代表者:佐島隆)(期間は平成12~14年度)の成果の一部をなす。研究の補助に対して感謝申し上げたい。

(注3) アレヴィーに関する一般的な説明には次がある。佐島隆「アレヴィー」(『世界民族事典』<綾部恒雄監修>弘文堂, 2000年) 58~59ページ。他に関心の中心を伝承においたアレヴィー・ベクタシ文化については次がある。佐島隆「伝承のアレヴィー・ベクタシ文化—口承・書承・多様な伝承様式—」(菊池繁夫・佐島隆編『異文化コミュニケーション研究—伝えると伝わる—』大阪国際女子大学・女子短期大学異文化コミュニケーションセンター, 2001年, 97~121ページ)。

(注4) Lütü Kaleli, *Alevi Kimliği ve Alevi Örgütlenmeleri* (İstanbul, Can Yayınları, 2000), pp. 21-27.

(注5) アレヴィー系出版社ジャン・ヤコンラル社主のアーディル・アリ・アタライ氏とのインタビュー(2000年9月15日)によると、他の三団体とはガリップ・デデ・テュルベシとシャフクル・スルタン・デルギャーフを中心とした(1)に分類される団体と、(3)に分類されるジェム・ワクフである。

(注6) *Karacaahmet Sultan* (İstanbul, Karacaahmet Sultan Kültür ve Tanıtma Derneği Yayınları, 1998), p. 26.

(注7) *Ibid.*, p. 27.

(注8) Mehmet Yaman, *Büyük Türk Akıncısı Evliyası, Hekimi Karaca Ahmed Sutan* (İstanbul, Karaca Ahmet Sultan Turbesinin Koruma Derneği Yayınları, 1974), p. 194. およびアタライ氏とのインタビュー

による。

- (注9) アタライ氏とのインタビューによる。なお、他の団体の創設は1980年代後半以降である。
- (注10) カラジャアフメット協会規約第2条より (*Karacaahmet Sultan*, pp.96-97)。
- (注11) カラジャアフメット協会規約第6条A項より (*Ibid.*, p.95)。
- (注12) カラジャアフメット協会規約第8, 10, 11, 12, 13条より (*Ibid.*, pp.100-109)。
- (注13) İbrahim Hakkı Konyalı in *Yeni Asya*, Jan. 1, 1975.
- (注14) *Lütfi Kaleli, Alevi Kimliği ve Alevi Örgütlenmeleri*, pp. 35-36.
- (注15) 前者は暴徒化したスンニーたちによって多くのアレヴィーを含む37人が焼死した事件。後者はイスラーム原理主義者がアレヴィーの多く住む地区で無差別に乱射し、2人が死亡した事件。
- (注16) 同協会青年部副部長ムラット・カヤオウル、同協会パーラマ教室講師ハサン・エルジャンらとのインタビュー (2001年3月28~30日) による。
- (注17) スンニーではイマームとはモスクでの礼拝を取り仕切る人のことを言うが、アレヴィーたちは預言者の正統的後継者といった意味でこの呼称を

使っている。聖アリ以降全部で12人いる。

- (注18) ムラット・カヤオウルとのインタビュー (2000年8月27日) による。
- (注19) *Rıza Zelyut, Öz Kaynaklarına Göre Alevilik* (İstanbul, Yon Yayıncılık, 1992), p. 182.
- (注20) たとえば1998年におこなわれた講演は「アナトリアのアレヴィー」、「スィワス事件とビル・スルタン・アブダル」、「共和国とアレヴィー」などであった (Hıdır Uluer, “Karacaahmet Sultan Derneği'nin 1998 Yılında Yapılmasını Öngördüğü Kararlar ve Yapılan Hizmetler,” *Gönüllerin Sesi Karacaahmet Sultan*, 59, Dec. 1998, pp.4-5)。
- (注21) スンニーが参会することに関してはケマル・デデが「この十年来、集会に参加するスンニーの人々の姿が見られる」と同協会が発行するインタビューで言及している (“Karacaahmet'te Cemler Sü-rüyor,” *Gönüllerin Sesi Karacaahmet Sultan*, 59, Dec. 1998, p.48)。
- (さいとう みつる／東京芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程)
- (解題:さしま たかし／大阪国際女子大学人間科学部国際コミュニケーション学科助教授)